

## 第2回栄村むらづくり懇話会

—健康福祉部会—

(以下 Q: Question A: Answer O: Opinion)

### 【第1節 高齢者福祉】

Q: 具体的に、特養の施設建設といったものはこの枠の中に入らないものなのか。

A: 特養の施設建設については、基本的に広域で働きかけていくということを中心に盛り込むこともいいのではないかと。

Q: 村の中小介護施設を社協に委託することが望ましいとのことだが、現実的に可能なことなのか。

A: 村と一緒に研究しながら進めている。

O: 高齢者や二人暮らし世帯が増えているなかで、介護を必要としないが予備軍として村から呼びかける、働きかける必要というのが今後増えてくると思われる。一日誰とも話しをしないという高齢者もいるのが現状で、そういった高齢者のために何ができるかを考えなければならないが、それが地域社会の支援であり、行政の支援だと思っている。地域社会の支援という隣近所の見守りなどにつながると思うが、そういった具体的な何かが必要ではないかと思う。村に登録されているヘルパーがどの程度いるかはわからないが、70、80歳を超えて仕事はできないまでも、お茶を飲み、話を聞きに行くことくらいならできるというような人は結構いると思っている。そういった人たちが双方で楽しめるような取り組みを村の中でできればと考えている。昔は、集落にもそれなりの戸数があったので近所付き合いもできたのだが、最近では減ってしまって人が集まることもなくなってきた。戸数が少ない集落に対しての支援などもあればという気がしている。あまり具体的過ぎて良くないのかもしれないが、これから要介護者を増やさないために、つくらないために何をするかということを考えていかなければならないし、介護保険を使う人が増えていけば事務所の負担も増えるということも踏まえて、具体的に何か考える必要があると思っている。

O: 現実的に、介護保険医療がパンクするということが見えてきているので、要支援となっている方を、総合事業というかたちで村が計画を立てるかたちになると思われる。将来的には、介護度の低い方についてはサービス給付額を減らしていきたいというのが国の本音だと思う。そうすると、村も、介護サービスを社協にお願いするなかでも能動的に対策を打ち出していかなければならないのだが、費用の負担もある。現実的に、そういったものが近づいているので、そういったものをどのように進めるか、それぞれ考えていく段階。文言として具体的に書ければいいのだが、表現が難しい。栄村のように、これだけ小さい村に多くの集落があり、且つそれらが離れているというのは、財源が限られているなかでどのようにやったらいいかというのが、この振興計画に限らず色々と議論していかないと村もパンクしてしまうのではないかと不安があり、苦慮しているところ。

O: 地震の後、顔を合わせる機会があればということで、月に一回ずつ森の公民館で集まる

会をしていると聞いた。行政が入らなくても、住民が主体的にそういった会をしているところもある。そこで、自分たちの趣味を楽しんでいるという話も聞いたのだが、それというのは、生活のなかでの張り合いであったり生きがいであったり気持ちのうえでの活性化になっていると思う。そういった、みんなが元気になれるような機会があれば要介護者をつくらないでいれるのかなと思っている。

○：確かに、なるべく寝たきりにならないための抛出などはもっとやっていく必要があるのだが、先ほど述べたように世帯が多く、ハードもソフトの面も充実させるなど課題があると思っている。社協と行政でも、そういった話を増やしていかなければならない。そのためには、それに携わる人材がいらないため、そのあたりも考えていかなければならない。

○：資料には「高齢者が生きがいの持てる社会の構築を目標に、介護予防と日常生活支援体制の充実と地域で共に支えあう環境整備につとめます」とあるが、高齢者の中には要支援に向かいそうであったり独り身だったりする人もいて、地域の公民館や学校に集まるなど、人と拠点の整備ができればと思う。

○：何か具体的な例をあげようとするのが難しいかもしれないが、集落ごとに「やりたいこと」や「やりたいけど誰かやってもらいたい」のように、地域住民同士で呼びかけをするような取り組みがあればいいのではないか。

○：集落にもよると思うが、地域の高齢者同士の繋がりの強さはさまざま。ただ「保険」や「介護」でくくられてしまうと発展性がなくなってしまう。やはり、色々なところで連携していかないとお年寄りが元気になるということにはならない。

Q：生活支援コーディネーターというのは、どういった区分なのか。

A：在居生活について、アドバイスをするなど支援をする人を配置する構想。各地区での介護予防など、こういった人たちを見つけ育てて、配置していく必要がある。

○：震災のように、緊急で避難しなければいけないというようなときに、その地域に誰がいてどうするかといったことや、そのなかで高齢者や介護が必要なひとをどうするかということを考える必要があると思う。それは避難後も同様。

○：役場としては、そういった事態の場合にどうするかという福祉避難に関するマニュアルはある。そのあたりでいうと、防災の分野になるが、そういった事態まで想定しては計画をすることが難しくなってしまう。

○：現状と課題に「役員のみ手のないクラブが出てきている」とあるので、施策の展開には「老人クラブの組織体制見直しによる役員負担の解消」を入れてみてはどうか。

○：年配の方が持っている知識や経験、文化を、子どもも含めて若い人たちに教える機会をつくって見ては。発想の転換ではあるが、それが高齢者にとっても生きがいになると思う。

## 【第2節 子ども福祉】

Q：保育料の無料化は、個人的にはどうかと思っているが長い目でみるとこうなっていくのか。

A：実質的にという表現になるのでは。保育料に見合ったものを返礼することで、保育料の負担を軽減するなどがそれ。次年度予算から考えていくということだと思う。

O：無料化にすることが悪い方向に進むことも、可能性としてゼロではないのではないかと。それが実質ということであれば良いのかもしれないが。

O：現在、未満児の数が年々増加傾向であり、施設の改修は一刻も早くお願いしたい。

Q：未満児が増えているとのことだが、保育士の人手は足りているのか。

A：人数自体はそれなりにいるが、それでは計れないものもある。例えば、食事など一対一で対応しなければならぬものがあるので職員は休憩もとれなくなる。人数ではなく、預かる時の子どもの状態で、職員の負担は大きく変わってくる。

### 【第3節 ひとり親家庭福祉】

※意見・質問等無し

### 【第4章 障がい者福祉】

Q：在宅福祉サービスについて研究するとあるが、栄村でいうとどんなものをイメージすればいいのか。

A：栄村にはこういった施設が無いので、相談があれば支援を検討していくということになる。本人の希望があれば、そこにコンタクトを取り、入居の可能性などを協議するということになる。

O：以前、障害を持つ子どものいるご家庭で、子どもと一緒に入居できる施設に入りたいという声を聞いたことがある。入居までは無理でも、違った方面での支援があればと思っている。

### 【第5節 結婚対策】

O：結婚のイベントなどのパンフレットがゆうそうで送られてくると重たく感じてしまう。できれば、メーリングリストや LINE のグループ作成のように、気軽に案内配信してもらえそうな仕組み作りをしてもらいたい。今の方法だと、押し付けられている気分になってしまう。

O：良いご意見だと思う。ただ、メールが無い人もいると思うし、個人情報の取扱いが厳しくなっているので検討してみたい。

O：社協でも、婚活の関係で委託を受けて色々やらせてもらっているが、昨年行った「婚活セミナーの開催」などをここに載せてみてはどうか。県内には「長野結婚お見合いマッチングシステム」というお見合いの登録システムがあり、その活用もここに載せてはどうかと思う。また、今後やりたいこととして、一人親の家庭の婚活支援をしたいと思っている。

O：「外国人配偶者」という表記は、決して軽蔑したものではないというのは前提として言うが、五文字にすると、個人的イメージとして女性の外国人を紹介するように捉えてしまう。

施策としてやるのは個人的に良いと思うが、文字にすると多少抵抗を持ってしまう。

○：私が思うのは、外国人の方に来てもらったとしても、違う文化、違う言語のなかで生活が苦しくなってしまうと、子どもにしわ寄せがいつてしまう。そうなると、親子で支援が必要になるなど、福祉の面でケアすべきことはいくつかあると思う。この文章を読んで、個人的にはそれを感じてしまった。

○：この文については、要検討で。

#### 【第6節 医療の確保】

○：飯山の日赤で、分娩の医師が居なく、休診になっているらしい。飯山市を中心とした市町村で、人材確保の働きかけをして欲しいという声も聞いたことがあるので、ここに盛り込むというのも一つではないか。

○：飯山日赤では経営改善計画で、医師確保に向け動いている。それは、自治体の補助など支援はあっても、あくまで日赤の努力。

○：個人的にジェネリックについて知識が無かったので、医療費が安くなる方法を逃してしまった。村として、そのあたりを周知できれば多少なりとも医療費の負担を減らせられるのではないか。

#### 【第7節 健康増進】

○：今もたまにはあるが、同世代の子どもを持つ家庭と話しをすると、「自分の家だけではなかったのだ」というように安心するということもあると思うので、そういった機会は大事にされたほうがいいと思う。

○：復興記念館「絆」に子育て支援ルームができたので、その活用とPRができればいいのではないかと思う。

Q：その利用について、写真などでPRしたことはあるのか。

A：HPに掲載した。しかし、平日は共働き家庭が利用することなく、休日は家族連れで出かけてしまうので、幅広く利用とはなっていない。

Q：「通所サービス」とは、「すみれ」をイメージしたものか。

A：「すみれ」もそうだが、それだけでは物足りない人には他も紹介するなど支援するようにしている。

○：障害までいかない鬱状態の人の支援も考えて欲しい。その状態にいたらなくても、話をしたい人、相談したい人はいると思うし、そういった人を受け入れる場があればと思っている。

A：そのために保健士がいるが、自分から発信はしないと思う。そこが難しい。

Q：健康増進計画は、何カ年計画とかあったのか。

A：分からない。

○：認知症の方も増えているなかで、本人だけでなく、その家族をケアすることについても

考えてもらいたい。家族も含め、介護者の苦勞などを吐き出せる、外に出かけて気持ちを切り替えるといったことができれば。

Q: 保健推進員については仕事がたくさんあると思うが、人が少ないところで推進員のなり手がいないといった問題はないのか。

A: 地域差はある。また、年齢によっては役員会に参加できないといったようなことはある。

Q: 「村民体操」は皆踊れるのか。

A: 保育園では教えていることもあって、園児たちは踊れる。教えてくれる人がいないと困難なことではあるが。

以上